

原 著

## リハビリテーション医療系大学1年生の状態不安状況について —入学から前期定期試験1週間までの縦断的研究—

西田 齊二<sup>1)</sup> 田丸 佳希<sup>1)</sup> 杉原 勝美<sup>1)</sup> 銀山 章代<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 四條畷学園大学リハビリテーション学部

### キーワード

リハビリテーション医療系大学, 大学1年生, 不安

### 要 旨

2014年の文科省の調査では、高校から大学への“円滑な移行”ができていないことを理由に退学した者の割合は、18.9%に上った。現在、入学後のまもない時期が適応への重要な移行の時期であるとされている。本研究では、大学への円滑な移行、適応という観点から、リハビリテーション医療系大学1年生の『不安』に焦点をあてた。本研究の目的は、大学入学直後から定期試験1週間前までの4期における、『不安』点数の変化の特徴を縦断的に捉えることである。結果、性別により状態不安点数の変化に大きな差異が見られた。男性は、入学1ヵ月目に状態不安点数が最も低くなり、定期試験1週前に最も高くなる特徴があった。一方女性には、3期まで状態不安は上がり続け、試験1週前で、最も低くなる特徴が見られた。これらは、性別による大学生活に求める志向の違いが反映されていると推察された。現段階ではデータからの推察が中心となっており、今後各期に行った不安対象についてのアンケート内容の整理、分析を補完的に行うことが必要と考えられた。

### はじめに

「中途退学や休学等の状況に関する調査」(文部科学省)が、2014年国公立の大学と短大、高等専門学校を対象に実施された。正規就労に就かない大学中退者が増加するなかでの、社会的な損失の拡大という背景、また経済的事情により退学した者への援助を検討するという目的が、挙げられる。

調査結果から、「学業不振」、「学校生活不適応」といった、高等学校から大学へのいわゆる“円滑な移行(Transition)”ができていないことを理由に退学した者の割合は、18.9%に上る<sup>1)</sup>。

“円滑な移行”ができていない背景には、基礎学力の全体的な低下と、学力の格差が生じていること、また、将来にわたる見通し・目標を持って大学を選択、入学していないこと、など「学業不振」、「学校生活不適応」の素地が見られる。“円滑な移行”のために、日本独自の“初年次教育(First year experience)”の重要性が求められている<sup>2,3)</sup>。

藤重ら<sup>4)</sup>は、大学新生は、大学入学直後に始まる授業科目の履修案内・履修登録、から始まり、課題の提出など、学習面での変化に適応しなければならず、加えて、

通学や暮らしに関連した生活面においても、環境に適応することが求められることを指摘している。つまり、大学1年生は入学後のまもない時期が適応への重要な移行の時期であるとしている。

また藤井<sup>5)</sup>は、大学生における引きこもり、スケジュールアパシー等、多様な不適応現象の背後には、常に『不安』が存在している、と述べている。

これらの先行研究から、大学入学直後から、大学生活への適応における重要な時期は始まっており、適応に関する特徴的な心理的『不安』状況が存在することが示唆される。

その中でも、リハビリテーション医療系大学生(以下リハ大学生)は資格取得という目的性が、比較的はっきりしており、学業としてクリアしていくことを明確に求められる傾向がある。また、高校と大学における学業内容のギャップという意味でも、一般大学と比較すると大きいとされている<sup>6)</sup>。

これらのことから、リハ大学生として、また1年生として特徴的な心理的『不安』の変化があるのではないかと考え、大学への円滑な移行、適応という観点から、リハ大学1年生の『不安』に焦点をあてた。

本研究の目的は、大学入学直後から定期試験1週間前までの4期における、『不安』点数の変化の特徴を縦断的に捉えることである。

『不安』の様相を把握することが、大学生活への“円滑な移行”へとつながる糸口となるのではないかと考えるものである。

## 方法

### 1. 対象

平成26年4-6月においてA大学リハビリテーション学科作業療法専攻在学中の1年生(男性22名、女性29名、計51名)、4回にわたり尺度施行しているが、対象者は同様である。

### 2. 施行した尺度

#### 1) STAI(State - Trait Anxiety Inventory)

刻々と変化する不安状態を示す「状態不安尺度」と、不安になりやすいパーソナリティ特性を示す「特性不安尺度」で構成され、この2つを区別して測定するための質問紙法である。各20項目、5段階評価であり、得点の理論的範囲は、それぞれ20-80点である。

今回は、検査時の不安を測定する意図から、「状態不安」のデータのみを用いている。

### 2. 手順

STAIは4期に分けて、同一対象者に施行した。また、尺度施行時の背景にある時期の意味合いは以下の通りである。

- 1期：4月10日 入学後1週目
- 2期：5月8日 入学1ヶ月目の週
- 3期：5月22日 定期テスト3週間前
- 4期：6月5日 定期テスト1週間前

### 3. 分析方法

統計処理は、SPSS20.0Jを使用し調査結果を解析した。なお、各実施期のデータについてShapiro-Wilk検定を行い、データの正規性が確認された。

- 1) 各実施期間の状態不安点数の変化比較については、対応のある1要因分散分析にて検定した。
- 2) 各実施期ごとの、性別による状態不安点数の比較については、*t*-test(対応なし)にて検定した。

## 結果

### 1. STAI(状態不安)点数の結果

状態不安点数について、全体および性別ごとの平均値およびSDをTable1に示す。

	全体		男性		女性	
	M	SD	M	SD	M	SD
1期	44.26	1.54	44.00	1.46	44.45	2.49
2期	43.86	1.37	40.82	1.71	46.17	1.71 *
3期	45.88	1.79	44.90	2.58	46.62	2.49
4期	43.24	1.86	46.37	0.88	40.86	3.15
			* <i>p</i> < .05 <i>t</i> -test(対応なし)			

#### 1) 状態不安点数変化の特徴 概略(Figure 1)

まず、対象者全体では、1期・2期とほぼ横ばいであるが、3期に状態不安点数のピークがあり、4期に下がるという特徴がみられた。

男性では、2期に最も低い値を示し、状態不安点数のピークは、4期にあった。

女性では、1-3期にかけて緩やかに上がり続け、3期に状態不安点数のピークがあり、4期に急な低下を見せるという特徴が見られた。

#### 2) 実施期の間での状態不安点数の比較

対象者全体では、実施期の間で、状態不安点数の変化に有意差は認められなかった。(Figure 1)

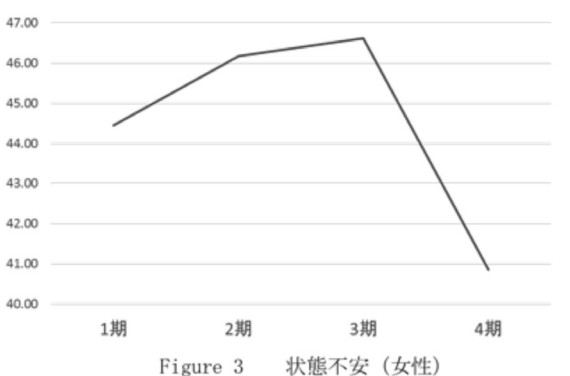
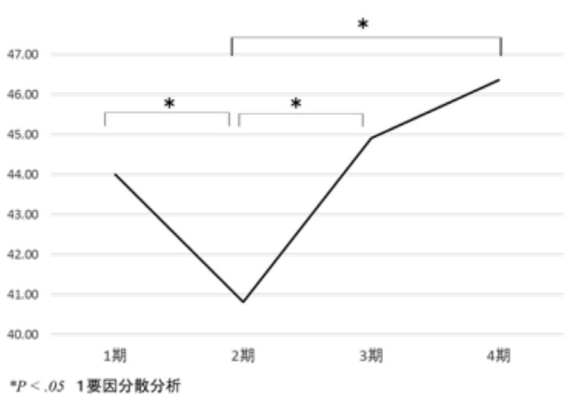
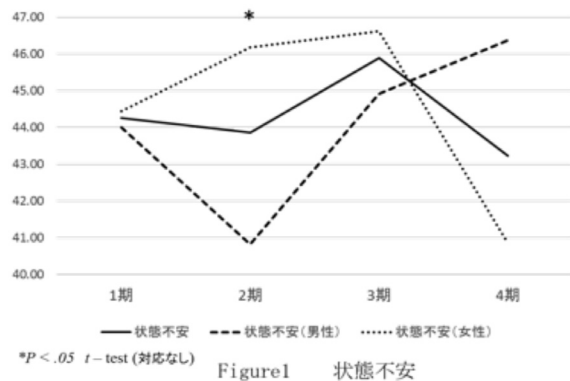
また、女性においても、同様に実施期の間で有意差は認められなかった。(Figure 3)

一方男性では、2期と1期、3期、4期との間で有意差(*p* < 0.05)が認められた。(Table 2)(Figure 2)

		平均値の差	
		有意確立	
2期	1期	-3.18	0.02 *
	3期	-4.09	0.40 *
	4期	-5.55	0.02 *
* <i>p</i> < .05 1要因の分散分析			

### 3) 性別による状態不安点数の比較

次に横断的に、各期ごと性別における状態不安点数の比較をしたところ、有意差が見られたのは2期であった。(Table 1) (Figure 1)



### 考察

#### 1. 男性における状態不安点数変化について

結果より、1年生男性では2期が最も低い値を示しており、1, 3, 4期それぞれの状態不安点数と有意差が見られた。2期は、大学入学後1ヶ月目の週である。一方最も高い点数を示した4期目は、前期定期テスト1週間前である。

大久保<sup>7)</sup>は、適合感についての研究で、周囲に溶け込めなじめていることから生じる気楽さ、快適さ、居心地の良さの感覚を表す項目を「居心地の良さの感覚」とし、大学生男性の方が「居心地の良さの感覚」を適合感として重視していると述べている。

今回の結果から、男性において1ヶ月目に最も状態不安が低くなるのは、同様の心理的背景があるからかもしれない。まずは履修登録、授業形態、課題の提出、各小テストなど大学システムへの一定の慣れ、またクラスメンバーなど対人関係の慣れの感覚を、男性は一旦この時期に求めやすくまた持ちやすい、ことを示しているのではないだろうか。

また、以下はデータからの推察に留まるが、「居心地のよさ」を得たのち、その後少しずつ、初めての定期テストへの不安が高まり、直前にピークを迎える、という心理的变化の特徴があるのかもしれない。

#### 2. 女性における状態不安変化について

結果より、1年生女性では男性のように2期で状態不安が下がることはなく、3期目に高値のピークを迎え、4期目に急に下がっている。

前述した、大久保の研究では課題や目的があることによる充実感を表す項目を「課題・目的の存在」とし、大学生女性が適合感として有意に重視していると述べている。また、周囲から信頼され、受容されている感覚を「被信頼・受容感」とし、同様に女性に有意であるとしている。

以下も推察ではあるが、入学後1ヶ月を越えて状態不安が上昇している背景には、1年生が「課題や目的」を一定明確にできるまで、加えて「被信頼・受容感」を得るまでの期間の長さを反映している部分があるのかもしれない。この点については、久保<sup>8)</sup>も、大学生女性は男性よりも「専門的知識や技術の習得」を重視し、長期的なスパンの不安、例えば卒業後の不安を強く、また早くから感じていると述べている。

但し、定期テスト1週間前の状態不安の急な低下に

関しては、現段階で説明がつきにくい。前述の久保は、大学生女性は男性に比べ、「学業不安」は弱いと述べており、4期の不安点数の低さと関連するのかもしれない。しかし、初めての定期テスト1週間前に生じた急な不安低下を説明するのに、充分ではないとも考えられる。

### 結語

本研究では、大学への“円滑な移行”にとって、大学1年生を重要な時期と捉える社会的な背景から、リハ大学1年生の「状態不安」の変化について、前期後半までの4期にわたり縦断的研究を行った。

結果、性別によって、「状態不安」の変化の仕方に大きな差異があることがわかった。

男性では、1ヶ月目に状態不安は最も低くなり、テスト直前に高い値を示すなど、まずは外的な状況への慣れを感じるを適合感として重視しているのではないかと推察された。

一方女性では、3期まで状態不安は上がり続け、4期(定期テスト一週間前)で急な低下を見せた。これには、大学生女性が課題や目的の明確性、専門的な知識・技術の習得を重視し、長期的スパンでの不安を、早期から感じていることが推察された。但し、初めての定期テスト1週間前に、急な状態不安点数低下を見せた背景については、十分な説明ができなかった。

今回の考察は、データからの推察が中心であり、質的なデータでの補完が必要と考える。各期ごとに行った不安対象についてのアンケートの解析・整理を行い、その結果から、次回の研究ではより実情に近い、リハ大学1年生の不安状況、適応状況について検討したいと考える。

### 文献

- 1) 辰巳 哲子：大学中退後のキャリアに影響する大学入学以前の経験。Works Review Vol. 10, 優秀論文, 6-15, 2015
- 2) 山田剛史：学生の視点を踏まえた初年次教育の展開 - 多様化を見据えた教育改革の組織化に向けて -。島根大学生涯学習教育研究センター研究紀要, 15-29, 2007
- 3) 濱名 篤：初年次教育の必要性和可能性。大学と学生 54, 6-15, 2008
- 4) 藤重育子, 本田周二, 清水寛之：大学新入生の学校適応に関する心理学的検討：質問紙調査によって抽

出された9事例に関する質的分析。神戸学院大学教育開発センタージャーナル, 3, 17-31, 2012

- 5) 藤井義久：大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討。心理学研究, 68, 441-448, 1998
- 6) 仙波 浩幸, 清水和彦：理学療法専攻学生の精神的健康度。豊橋創造大学紀要 15: 99-112, 2011-03.
- 7) 大久保智生：青年の学校への適応感とその規定要因 - 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討。教育心理学研究, 53, 307-319, 2005
- 8) 久保光正, 徳田完二：心身両面からみた学生期のライフサイクル。北海道大学紀要, 49(2), 53-65, 1999

**The state-anxiety of the 1st grade university student of PT/OT  
— A longitudinal study from the admission until one week  
befor of final examination of previous semester —**

Saiji Nishida<sup>1)</sup> Yoshiki Tamaru<sup>1)</sup> Katumi Sugihara<sup>1)</sup> Akiyo Kanayama<sup>1)</sup>

1) Faculty of Rehabilitation, Shijonawate Gakuen University

**Key words**

rehabilitation medical care university student, university freshmen, anxiety

**Abstract**

The survey by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of 2014, the ratio of student who quitted school for reasons of "the smooth transition" from the high school to the university not being done was 18.9%. It is reported that it begins after a university admission at the time when it is important to the adaptation to the university. In this study, we focused on "the anxiety" of the first grader of the rehabilitation medical care university from the viewpoint of smooth transition and adaptation to the university. A purpose of this study is to clarify the characteristic of the change of "the anxiety" mark between the fourth until one week before the regular examination for running from the university admission. As a result, a difference was considerably seen in the change of the state-anxiety mark between genders. Men, state anxiety mark for admission 1 months is the lowest, also it was the highest in a regular test 1 week before. On the other hand women, state anxiety continues to rise up to three terms, was the lowest in a week before the test. These differences may reflect the difference in orientation to seek the adaptation of university life by gender. At this stage, since it is inferred from the data, it is necessary to organize and analyze the questionnaire contents of anxiety interest.

